

# ミオヤの光 歸趣の巻

- 1、所求、所歸、去行
- 2、永への法悦と日々の仕事に勇む力
- 3、無量壽佛威神光明最尊第一
- 4、光明獲得
- 5、往生の二義
- 6、彌陀と諸佛
- 7、萬法統攝
- 8、一心十界と終局の歸趣

## 所求。所歸。去行。

清き光に照され慈愛のあたらかなる家庭の山中家の子女のきみ  
たちまでにまうす。

宗教は先づ安心を定むることが基礎であります。安心とは人生の主義と目的との確定することであります。苟も人生に此安心未だ定まらざる人は盲目的生活と申します。最高等なる宗教心にて定むべき安心に三の條件あります。一、所求、二、所歸、三、去行との三つであります。初め所求とは人生の目的として要求する所であります。要求なしに信仰の立つわけはない。然らば何が人

二

生の目的としての要求する所でありませうとなれば先づ人は若し出来得るなれば永遠の生命(永恒)に生き通しに成りたいこと(常住)の平和を得たきこと、圓滿なる人格に成り度きこと。云ひ換ればいつまでも生き通ふしにしていつもたのしき平和にて安心のできる身となりてまた一切の人にも愛敬せらるゝ圓滿なる人に成り度いと云ふのが所求と申します。斯やうな望みは理想の高き人ならば何人にも起る要求でありますが然しながら斯やうな目的がいかにして達せられませう。此要求の満たすのは形の上ばかりでなく精神的に得らるゝのであります。此要求に満足と與へて下さるのが所歸の尊と申します。

二、所歸とは歸命信頼と申して宇宙に唯獨りの尊き御方が在して此の尊き御方にすべてを御任せ申して精神的に人生の終局の目的を満足させていたゞくのであります。

然らば其の宇宙に唯一の大ミオヤと仰ぐべき御方はいかなる御方で在すでせう。そは我等凡夫には分りませぬ。故に釋迦如來が此世に出で玉ひて其眞理を教へ玉うたのであります。宇宙間に一り絶対的に尊き御方を阿彌陀如來と號します。アミダとは空間に十方世界を照して一切の衆生の心靈を靈化し給ひて人格を完全にして下さる御方にてまた無量壽と申して永恒に生き通うしの義は御方自らばかりでなく一切の心靈を永恒に生き通しにして下さる御方

三

と云ふ義であります。此如來は宇宙間に獨り尊きと共にまた一切衆生の大ミオヤであります。

此如來が我等に與へて下さる御恵と御力は恰も太陽の光エネルギーを以て此形體を活して下さる如くに如來は私共に靈的無限の光を以て心靈を活かして永遠の生命と圓滿なる人格とに爲して下さる御方であります。

我等が精神の奥庭に伏せる心靈が大なる無量光如來の光明にて開發靈化せられて圓滿なる人格と爲り得らるゝと云ふならば然らばいかゞせば其要求を如來は與へて下さるのでありませう。是に於て第三去行方法を要するのであります。

第三、去行方法私共が永恒の生命と圓滿なる人格とが成就せんには宇宙最尊の無量光如來を歸命信賴すべきのであります。そして如來の光明と衆生の信念との間に行はるゝ方法は念佛三昧であります。ナムとは私共がすべてを如來に任せて頼む意味にて、アマミダ佛とは絶待無限の太陽なるアマミダ如來のこと。我ら佛を念すれば如來の聖意に入り如來の大なる聖意は我らが心に入り大ミオヤの太靈心と我らの心靈の生命の通ふ所の精神を言に現はして、ナムアマミダ佛と云ふのであります。

精神的に大なる如來の慈悲と我らが念佛心と常に感應する所の方法を念佛と申します。我らは如來(大ミオヤ)の光明によりて靈に

生きて益々向上する所の人生であります。我らが人生は靈に活きます／＼完全に圓滿なる人としていたゞくのであります。

如來の絶對無限の一大靈電が一切衆生の發燈器の裝置する所に靈光は現はれます。

此靈力は衆生を永遠に活す力にて私共は大光明の中にます／＼向上的に生活してゆく所に價値ある生命光明の生活に入るのであります。

上來の要求と歸命の本尊(活ける本尊)と念佛とが確かに心に定つて益々向上する心の定つたのが安心決定したと云ふのであります。願くは山中家の御家庭の中に大ミオヤの光明が照り渡りて麗き心の花はかくはしく咲くやうに祈ります。

### 永への法悦と日々の仕事の上に勇む力

君よ。現在君が執てゐる職務をば眞に神聖なる物として大ミオヤが選みてさづけ玉ひし業として悦んでつとめて居る哉。將た是も人間の活役何か爲ねばならぬ故に此の職務を執つてをるに過ぎぬと思ひなされ玉ふ乎。私が此迄多くの教育家に就て其職務に對する心の置き方を窺ふに宗教心のある方は前に屬し、信仰心の無き方は多くは後の方に屬しておる様に見えます。君の現に執つて居ますつとめは他の金錢杯の物質のゐを取り扱ふ業とは殊にして

人間の最も貴重なる精神上のことに人格の基礎を造るべき教育の業務は最も神聖なる職務にして即ち天のミオヤより君に選みて授け玉はりしことなれば大ミオヤに感謝の意を以て悦び勇みて業に従事する時は、非常に大なる力を以て満足の念を以てつとむることができません。

君よ夫にしてもそれは全く宗教心が充分に成したる上のことにて候。然らばいかに宗教心を成就せんとなれば宇宙間に獨り尊き大ミオヤの實在を信じて其に歸命信順してミヤヤの恩寵によりて自己の改造を祈ることにて候。元來人間の天然の我は煩惱の皮殻に覆はれて如來の靈光を感受することができぬ。されば至心に念佛して無始の業障消滅し靈的光明を被ひりて心靈が復活せば如來との間に於て、如來よ、アナタは全く我ミオヤにて我は全くアナタの御子であるとの自覺ができる自覺と共に暖かなる慈悲に融化せられて眞に靈的に生きて來ます。

君よ、君が理想の人格標準となる人を紹介いたしますから君はそれをきよき理想の勝れたる同胞として其方を模範として人格を形成し修養し玉へ。

君は佛教の中に種々の方面に多く現はれておる觀世音菩薩の何なる聖者なる哉を知り玉ふ乎。彼の菩薩は種々の方面から見られておるけれども私どもの、彌陀と中心本尊と爲る如來光明主義よ

り觀世音菩薩を見る時はかやうである。

彼の菩薩は宇宙唯一の尊き彌陀尊の法王子たると共にまた彌陀を尊信する諸の信仰家の代表的聖徒である。されば今君が如來の光明に依りて靈に復活し常に彌陀の聖意を奉戴して彌陀に献げた心を以て自己の職務を神聖とし是ミオヤの使命として勇み進みて潔よく仕ふる心にて世に立つ時は即ち是觀世音の分身なると俱にいける觀世音である。

觀經に凭やうに説いてある。若し誠に彌陀を信念し彌陀の聖意の水に清められ心の花開きし者は即ち人間中の白蓮花である。蓮花は泥中より出でながら最も清淨皎潔にして麗はしき色と芳ばしき香とを呈しておる如くに人は煩惱の泥中より聖き信仰心が咲き出づるは恰も泥中より出たる白蓮に比すべく、されば觀世音菩薩も勢至菩薩も其が爲めに勝友と爲りて其人を愛護し玉ふ、いかにとなばれ其人は既に彌陀の子と生れたる者なればなりと。

觀玉へ、觀世音菩薩の尊像の寶冠に一の化佛を奉戴していますは即ち是れ大ミオヤなる彌陀尊なので而して相好圓滿百福莊嚴を以て人格を飾り胸に金銀瑠璃寶石等を以て璽珞として嚴飾するは即ち智慧仁慈正義安忍剛毅謙遜真操等の諸の道德にして是れ全く人格を莊嚴するの具である。然して有ゆる道德の根本は即ち彌陀の心光を信奉し慈悲を愛樂憶念し聖意の現はれを仰ぐ處のいと

きよき心である。

君、活ける觀世音よ。宇宙の心靈界に輝ける彌陀の光明によりて靈に復活し玉へ。活ける觀音として世に立ち玉へ。人生宇宙の主なる無量光の光明を以て自己の心光としミオヤの使命を果さんが爲めに献身的に最善の努力をする者は是れいける觀世音なり。また觀音の分身なり。

視玉へ太陽はすべての生物を活かす處のエネルギーを放ちて止まぬ。

彌陀は靈光を普ねく衆生の心靈に滲ぎて靈的の活氣を興え給ふて居る。

人は太陽の光を離れて活けることは不可能である如く、人の心は彌陀の光明を離れて活けることはできぬ。

彌陀の光明は人の心靈を永遠に活かす靈力である其光明を被むりて本とうに有り難き信仰心が開らくれば即ち觀世音の白蓮のそれと同じく麗はしき潔よき活きくした心と爲る。其信心の花開くが故に天の獨り尊き大ミオヤを信することができる。こなたからミオヤを信樂するが故にミオヤはこなたを深く愛護し玉ふ。彼の青蓮の如き清らかなる慈悲の眸は我等が上に注ぎ玉ひ。いとあたかなる慈悲に抱擁せらるゝ我等は眞に靈福を感じておる。彼の海よりも廣きみむねが通うてをるから永しへに法悦と妙樂と平

和とにくらさるゝのみならず大なる無限の泉源より流れ來る靈力を加被せらるゝが故に日々仕事のの上に勇みと力とを得てつとめらるる。

彌陀の光明に觸れて本とうに活きくして朝のかやく如く夕日のまばゆき如く、我心のうちに赫々として永しへに活躍し得らるゝは是不可思議の業によりてなり。

### 無量壽佛威神光明最尊第一

斯文は宗教に於て先第一に知らなくてはならぬ宗を標されたのである。宗に三義あり。獨尊。統攝。歸趣。獨尊とは宇宙間に絶對的偉大なる力を有てる唯一無比の尊き者の存在するを信認するそれが自己の活ける本尊となる。

他にくらぶ可き物もなく絶對的に尊く此の尊の外に全く歸命信賴すべきものもなく亦我を畢竟して救濟し玉ふ者は此の本尊の外に有るわけではない。佛教に十方三世の諸佛一切賢聖と云も悉く斯尊の分身にて此の尊を以て本地とす。一切諸佛神明の本佛なるが

故に威神力も光明も諸佛の及ばざる所である。故に獨尊と爲す。

統攝とは宇宙間の一切萬法を統て攝理し玉ふ權能在ます如來なり。

是一切萬法の中樞にして一切の法則の行はるゝ中心は即ち如來なり。

一切諸佛聖賢も悉く皆彌陀を中心とし彌陀に依て統治せらるゝものとす。是如

來は一切諸佛萬法の中心なることを明す。歸趣とは一切萬法の歸

する處諸佛の教ゆる法に則りて行爲するを佛行とす。眞善美の靈

界に歸趣する行なり。一切諸法萬行八萬の波羅密菩薩の向上進化

の終局は即ち阿彌陀佛國に歸着するにあり。阿彌陀佛國は無上涅槃

界にして一切諸佛も終局は涅槃界に歸して安住し玉ふ。

阿彌陀は一切の萬法の根本諸佛の本地にてまた一切萬法の中心

にて一切萬法の終局の歸趣する處なり。過去一切諸佛彌陀三昧に

依て成佛す。

亦楞伽經には十方三世一切法報應佛菩薩は悉く阿彌陀佛國より

生ず。

宗教には宇宙に唯一の獨尊を認信して之に由て救を求る本尊と

すべきも凡夫の窺知る處にあらず。此に於て大聖釋尊我らに示す

に無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛の光明能く及ばざる所と

教へ玉ふ。

如來は我等一切衆生の唯一の大御親に在ませり。斯御親の外に

我らを救玉ふ者有ることなし。宇宙唯一の大御親を眞實に信認し

て毫も疑はず斯如來に絶對的に歸命し信賴してついに變せざるに

至るを安心已に決定すと云ふべきである。

若し阿彌陀如來も一切諸佛と同一にして諸佛の隨一と認做す如

きは未だ宗教の眞理を得たるものでない。全く之諸佛の本佛にし

て獨尊絶對無比の獨尊にて一切諸佛を統攝して一切萬法の終りな

りと信するを宗の眞義を得たるものとす。

## 光明獲得

きよきミオヤの大道を宣布し流傳せんには先づ自己の實踐修行

せる倫道を諱に躰得すべし。古人曰く自行妙宗に暗ければ他を益

するに由なしと。道とは例へば若は帝都に通達する國道あり縣廳

を中心とする縣道また郡道あり。何れにしても其中心に向て趣く

の行程なり。帝都に趣くの道に就ざれば其目的の地に達すること

は能ぬ如し。況んや宗教殊に最も高等なる佛敎に於ける大みおや

の大道に於てをや。佛敎に精神と行爲とに道を五乗に分つ。人道、

天道、聲聞道、緣覺道、佛道是なり。人道とは人類としては自己

に五常即ち人格要素なる仁義禮智信の徳を具備し、都て倫道は父

子君臣夫婦兄弟朋友の倫理に之らを全うして人道を履行して人た

るなり。若し倫道を履ざるものは人格具備するものでも人倫を全

うしたものでない。

次に元道とは最高等なる理想と尊き十善を以て公明正大天道的の行爲天の道を行ふ人である。情操にも行爲にも天道的である。

聲聞道とは生死の苦を知り煩惱の本を殺し三十七道品の智慧を開きて道品を履行うて涅槃なる常樂の都に達す。聲聞の道の終目的の涅槃の都とは死後の彼岸にあらず。此三十七道品を階段的に進む時はついに初めに法眼を開きつぎには三明六通のさとりに登りて精神的に涅槃の都の明け来る羅漢のさとり開きて觀するに此處が即ち極樂涅槃界である。光明世界である。此の羅漢の涅槃に致らんには必ず四聖諦の内三十七道品の道を諦かに知りて而してその道を行はねばならぬ。

次に緣覺道とは先づ斯くある六道の生死の凡夫が三世に流轉して生死の苦を脱することの能はぬのは、其本凡夫の無明といふ心の闇である煩惱のくらき心からなす業は苦の本である煩惱から活動する業は苦の果を感ず。果より因を生じ因より果を發し生死流轉極りない。若し無明の本をしらへて精神に超然たる靈的光明が顯はれ來れば心が明るき故に生死を受くるような業を爲ぬ故に光明の中にて行ふてゆく階級的の道は即ち結果が緣覺の涅槃の都である。

次に菩薩道。之を通達すれば結局に佛果正覺の大涅槃である。

菩提薩埵とて菩提は佛にて薩埵は衆生である。如來の光明を受得した人と云ふ義である。此菩提道にも種々な方面から成佛に進む道はあれども今は大みおやの大道に生活する人を菩薩と爲す菩薩とは如來と共に在る人なり。また如來の靈應が我に在る人なり。如來の光明の中にて清きに向つて行ふ人である。

如來の靈光に養はれつゝある人、如來の聖旨を行ふ人である。

如來の光明の道は至善の世界大涅槃即ち極樂に達するなり。

光明の大道は即ち涅槃道である。如來と共に運ぶ路は大涅槃に達するなり。

人生の行程を只肉の生活の爲に闇黒に行ふ人は六道流轉の道である。

今傳道とは自から如來の光明の大道にふれてまたすべての人々を光明の大道に誘導し歩々に光明に向上し行きて悉く如來の使命を果す。

一切の所作悉く如來の命令なり。皆是佛行なり。如來我に在りて働きたまふなり。此の道を宣傳するなり。自己と共に光明の大道に行く事を勸むるなり。精神一たび光明の大道に出づる時は從來の六道流轉の凡夫とは意向に於て同じからず。人生の目的に於て異なれり。

人格の核たる靈に於て異れり。昨日の凡夫今日の聖子とかはり

六道の歧路に彷彿ひたる心が今は光明の大道を得たり。自ら大道に出で他を誘ふて光明の道に就かしむ。此を傳道といふ。

傳道の宗は三昧を傳道の宗とす。光明の大道に出でんに光明の發する中心なくてはならぬ。光明を諦に認めずんば自己の光明となす能はず。

如來は光明普く十方世界を照す。然も此の光明を自己の物となすに至らざれば我れに於て何かせん。

此の光明獲得を宗とす。光明を獲得せんとせば神人合一即ち如來心と吾と合一す可き念佛三昧是即ち宗とす。

念佛三昧とは即ち口常に聖名を稱へ意常に如來を念じ、身彌陀を離れず、心々常に彌陀を捨離せず念々如來と合す久々にして純熟すれば絶對なる大靈中の自己なれば自己の心靈に如來の靈光感發す。

感發すれば即ち光耀と現じ、または花を見、好相を感ず。如來の慈悲が表現して相好の靈應身と現す。

靈應の發現即ち自己の心靈顯はれにて聖靈感が即ち活きた信仰となるなり。靈的生命となるなり。此靈應常に我に在ます是念佛三昧發得すればなり。

是靈應即ち自己の本尊なり。常に我を指導し我が活動の原動力となるなり。道德制裁の指導をなすなり。

靈應は即ち如來なり。また分身なり。

教祖釋尊入滅の初遺命して曰く如來法身常住滅せざるなりと。

釋尊の心靈に住ます法身は展轉して弟子に傳はり普く傳播して廣く世に行はる燈を傳へて滅せず。法身即ち靈應なり靈應より發する光明常に我行為を照す靈應が光明に指導せられて常に行住座臥に如來と共に在るなり如來と共に行ふ個々の三業は常に光明の大道にありて向上して如來の光明界なる涅槃に進むなり。

光明の大道を流傳せんには先づ靈應我に在る念佛三昧獲得を宗とす。三昧獲得即ち光明の發得なり。自己未だ光明を發得せずして他を光明の大道に誘ふべき理あらんや。光明大道の終局目的光明發得は人生を靈界に導く。光明の大道は自ら無作に大光明界に通達するなり。

靈界は至真至美至善の靈界である。光明は智力に對して至眞を悟らしめ意志を至善に進ましめ感情を至美に化す。如來の靈應我に在りて我如來に靈化せらるゝ時は見開覺知眞理を悟らば靈化せられたる意志は善となり、靈化せられし情は樂しく快く現に光明大道に在りて日々夜々行ふ處常に淨土に向て向上す。之を往生とす。

## 往生の一義

往生淨土を傳道の目的とす。往生に形式と活動、理と事とあり。形式とは已に光明發得の上には從來の我にあらすしてみだの子たる我なり。即ち肉の我は靈我となり薩埵は菩提薩埵と爲る。光明を得た人と爲る。娑婆に居ながら淨土を觀す。相待因果の心にあらずして絶對靈界の人となる。

盡十方無碍光明中の人となり之を精神の形式に於て淨土の人となりしなり。次に娑婆にてみだの清淨光に靈化され玲瓏と輝き感情には法喜禪悅の妙味を常に感せられ意志は靈化して意業の所作悉く聖旨より我に現はるゝなり。

然れども事の往生とは往は至善に向ての行程にて歩々に向上し行きて薩埵の大道に進み階級的に進むを往とす。此には靈と肉、煩惱と菩提との建闘。若し光明を離れば忽ちに肉の煩惱に横領せらる。光明の靈力を以て逆襲す。

自力と他力の別は自力は罪惡にて他力は正善である。他力の光明を以て自己の間黒を破り歩々に新なる不斷の革新不斷の向上を一生に渡りて斷やさす。

此道徳の制裁は悉く如來の靈的光明によりて得らる。若し光明を得ることなければ終身肉の奴隸となりて三惡の間に墮落すること免れ難し。

光明靈化の力を以て一生を通じて至善の行程となし臨終の夕を

期す。之を往生の實行とす。

光明の大道を往進し勇越するの謂なり。傳道家は衆を率ひて光明の大道に共に進むを目的とす。即ち自己の心靈に燈りつゝある光明を以て三業の行爲を以て他人の意志を照し靈化の徳を以て大道に進ましむ。是を傳道の目的とす。

舊式の往生は世を厭ひて死に往きて死後に樂土に生るゝを意味す。今往生は精神的に自己心底の靈性を如來の靈光に開發せられ靈の伏能が顯動態となるを生と云ふ。復活の義である。復活の靈は光明の大道を勇進邁往して日々に新に生れ時々に活ける靈活を往生と爲す。

舊式は死なざれば目的達しがたく、今のは靈活すれば生じ靈活往進を以て目的とす。

## 彌陀と諸佛

彌陀は十方三世一切諸佛の本地にて一切諸佛は垂迹なり。彌陀は天の日月にて諸佛は水中に映する月の如し。十方無量の諸佛は彌陀の分身なり彌陀は一切諸佛を統一したまふ尊牀となる。彌陀は大海水にして一切諸佛は海中の波浪である。彌陀は一切諸佛を統攝せる本佛なり。故に無量佛と云ふ。一切諸佛とみだ一佛とは實には一牀の兩方面である。統一の本牀より見ればみだといひ、



分現したる差別の方より十方諸佛といふ。

佛教に眞實教と方便教とあり。甲は圓教とて宗教意識の圓熟したる人に對し、乙は未熟の機類に應じての教。若し一切諸佛はみだ一佛の分身にして彌陀一佛は一切諸佛と現はれし故に一切諸佛彌陀を離れて一切諸佛なく、一切諸佛を以て彌陀の徳を顯はす。故に一佛の無量分身とするは圓教にして一切諸佛は悉く皆別にして彌陀は諸佛の隨一とするは是別教である。

達者は彌陀は一切諸佛の本躰と説き、一切諸佛は彌陀の分身と説く。藕益大師阿彌陀經の要解にも彌陀一佛と六方恒沙の諸佛とは本來一體の異方面と見たるが如し大日彌陀釋迦は一躰三身にしてまします。若し大日を中心とせばみだ釋迦は之れに附屬し、みだを正面とすれば大日釋迦は左右の方面にて釋迦を本尊とすれば彌陀大日は裏面とす。彌陀の三尊を彌陀の三身とも釋迦の三身とも云ふべし。今は大日は法身の毘盧舍那と云ふ物心不二の本佛絕對無碍の本佛である。若し相對の清淨界と染法界とを分ちて清淨界に彌陀と顯はれ染法界の衆生を度したまふに釋迦と現す。

また大日と彌陀とは一體の異名にして宇宙絕對的無比の獨尊を秘密教には大日なる四方四佛を統る本尊とし、公開教には阿彌陀如來の四智と云ふ。能く眞理に通ずる者は大日と彌陀とは同體の異名なりと云ふ。

理に開き者は名に迷うて彌陀大日は全く別佛の如くに謂ふ。與教大師は大日と彌陀とは同體異名と釋す。卓見なる事識る可し。

釋迦と彌陀とは本體一なること彌陀無量光は人の身を受けて釋迦と云ひ、釋迦の大精神は盡十方三世に照り給ふ大光明である故に彌陀である。彌陀無量の光と無限の壽を離れて釋迦の精神なく人佛の釋迦出現したまはされば彌陀の大光明を現すことなし。

獨尊。如來は宇宙唯一絕對無比の尊きものである。一切衆生及び十方三世一切諸佛の父である。子は無量にして父は一、宇宙唯一の父は即ち如來である。故に威神光明最尊第一とは此をいふなり。

統攝。みだは一切萬徳を統べる四智圓かに照して萬法を攝めたまふ故に十方諸佛萬法を統攝す。

歸趣。一切萬行の歸する處に菩薩の波羅密向上進化の終局目的は彌陀涅槃樂界に歸趣するを極致とす。

三世諸佛も念佛三昧に依りて正覺を成すとは此の義である。然れば彌陀は一切諸佛の根本にてまた中心たること共に終局である。故に一切諸佛みだを讃嘆して止まず。一切の聖者も歸命して措くことなし。

みだは無限の光三世永恒の壽に在ます如來なり。誰か歸命せざらんや。

## 萬法統攝

三六

楞伽經に曰く十方諸刹土衆生菩薩中所有法報應化身及變化皆從無量壽極樂界中出。

是諸佛深秘の秘要にして實を克して論ずる事は十方無量の世界も衆生も悉く阿彌陀佛の本體より出で、而も理性具有すと共に依陀起性と偏計所執性の覆ふ所あるが故に自ら識らず、遠て不如理の作意を作して自ら迷没す自ら出離解脱すること能はず。

此に於て又阿彌陀佛は本體より發展して十方無量の世界に衆生を解脱せんが爲に法報應身を現じ各々衆生を度脱す。

大日阿闍阿彌陀釋迦等の如し、變化身とは孔子、ソクラテースモーセ。ヤソ。マホメット。達磨等の如し。

本體の阿彌陀とは學語には眞如。本法身。如來藏性。第一義諦。等の種々の名詞を以て其本體を詮表す。

宗教の客體としての名詞に阿彌陀の號最も適切なり阿彌陀梵語此には、無量光。無限絕對精神態光明。全慧。全能。神聖。正義。恩寵。等の無量不可思議の靈徳を以て法界を無邊に無碍に照して一切を解脱靈化する勢力及び性能なるを詮表する義なり。又無量壽と云ふ。其絕對無限の本質は永劫不變に常恒存在して一切を解脱靈化せしめて神的活動せしむる義なり。其他阿彌陀の

三七

名字の中には無量功德の義を含藏せり。

十方諸佛と云も其本體は阿彌陀にして彌陀の本體の内容には無盡の法界を含蓄して遺すことなく故に諸佛の本地一切萬法の統攝する處一切の勢力の歸趣する處なり。

妙法と云ふも死的法軌にあらず。妙法。事理の活動する原理悉く永劫常然に生々活潑々地阿彌の全體大用にあらざるはなし。

個々の一念に三千の理の具すと云ふも個々本來佛性無邊の聖徳を具すと云ふも之が根底となり又之を統攝し一切の歸趣する處なるべからず即ち一切を統攝して歸趣すべき光を與ふるものは即ち阿彌陀無限の光なり。

たとへ何ほどに理を盡し力を致して究むるも阿彌陀の外に出でたる宗教客體あることなし。深く思ひ熟ら考ふべし。

## 一心十界と終局の歸趣

華嚴に心は巧なる畫師の如く種々の五陰として作らざるなしと。此心是佛を造り此心衆生を作る。心と佛と衆生とは是三無差別。心の妙法たる一念の心が三千性相百界千如を具足して滅する事なし木來心性に三千の性相具足して循業隨縁に發現するが十界三千の境界となる。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、之を六凡と名づける。聲聞、緣覽、菩薩、佛界を四聖法界と名づ

三九

け此十界は本同じ一の心性なれば各一法界に十界の理性が具足して循業隨緣によりて十界の内何れも造り出すなり。

十界には相と性、本體と力用と作業と、習因と助緣と、結果と報應と、本末統一するの十法あり。

地獄には相と性格と本體と力用と作業とは最賤劣の苦の相。すべて苦なる惡ならざるはなし。其地獄の苦體及苦の相となる。之

の因は惡習横惡の誘惑の刺戟によりて惡性格を作る。惡の用と作業とが習因となりて精神即ち意志に地獄の塑像が已に成熟して之

を鑄る處の惡業の材料が充分終身に作業せしによりて印壞文成忽ち人の色陰が轉じて直に地獄の五陰即身體と精神とが發現するなり。

邪見の衝動より肉慾我慾の爲に殺盜邪淫の身に於る、惡口詐僞等の語、貪瞋邪見忿恨惱嫉憍慢等の心。惡習因が終に惡の性格となりて塑模となり不正の意向によりて肉慾の爲に殺盜淫等中品の

惡業の材料を以て肉慾的の習因の性格を塑模る處の無財餓鬼。

我慾の爲めに他を壓倒し、自己の私慾の爲には、自己及び他人の害をも顧みず中品の殺盜、口業の惡業材料として、我慾の塑像

の無財餓鬼を作る。

寢間にして人理を辨せず、良知良能開展せず、性肉慾の動物生活

を惡道と名く。

上品の惡は彼は正知と善者との正反對なる邪見暴惡の惡衝動より惡業をなす。彼は惡の方面が開展して善に反對す故に地獄なり。

中品の惡は彼は肉慾我慾の方面のみ開展し、公道に反乖す、彼は肉の爲に靈を犠牲にす故に餓鬼道に墮して、餓渴に煩悶して止

ことなし、彼は日々に守財奴なりまた肉の奴隸なり。

下品の惡は、人面獸心彼が意象を暴露せばいかゞ何の處にか人格あらん、身を養ふ慾動物生活の外に何か彼が意志ならん傍生の

性格と謂すして何ぞや。

三善道  
善に三品あり業識即ち性格に三品あり此を三善と名づく。人あり善を作すも其意向としては傲慢にして宗教の理に於ても未だ識

らざるも敢て聞くことを用ず自から道ありと謂ふて眞善に非ず名を求め榮を争ひ權威を貪り、人の爲に尊敬せられんことを以て全

精神を作す。名を争ひ威を競ふ戰鬥彼が意に斷るなし。然れども彼れが名聞の爲に惡を作らず。

倫理を廢せず之を修羅道の候補者とす、人あり仁にして能く愛し義あり、禮あり、能く邪正を知りて苟くも邪に陥らず好て善を作す。

正當なる人格あり倫理に戻らず彼は形ち人たるのみに非らず、

四四

全く人格ありて倫理的生活をなすは人にして又人なり。

人あり仁にして博く愛し、倫理を正し、高き理想ありて最も公明正大なる衝動より善をなし彼は天道に則りて正義あり國家の爲に人類の爲に身を犠牲にすることを厭はず、情操の清淨高潔にして志節天の如し、能く愛し能く行て厭ふことなく他に施して倦むことなく最上品の善を作すは天上なり。

是三善道の塑像にして且つ材料なり、斯の如く三品の神識即ち性格は三善道に配す可し。三善と三惡とを合して六道と名づく。

此の六道は一の善惡二性の上中下として何れも未頃天然の宗教の門に入らざる心志神識にして、其理想も目的も信仰も隨て天道人理を出でず故に之を六凡と爲す。

進で六凡を超越して生死の外に出で人間道の表に超て高く、涅槃の聖域に神を栖まして三界に超絶して精神は高く涅槃に在て迹を人間に示すもの四聖と爲す。

一に聲聞。此肉慾我慾の源なる一切惡衝動の根底なる主我を斷滅し至理と精神の内の面的に一致し、高く心を三界の表に出で自ら寂滅を樂とする者は聲聞是なり。是らは自ら發悟の慧あるにあらす、又先哲の模範によりて之を習ひ之に軌つて眞の解脱をうる。

緣覺は此實行的哲學者とも名づくべく、自らよく自己の源底を究め生死因縁の原理を盡し、理を究め性を盡して主我を脱し生死

四五

を超て清淨なる虚理と、心意を一致して靈妙なる精神生活を營むものを緣覺と云ふ。

菩薩は菩提薩埵、覺有情の梵語絶對眞理の佛陀を理想し内面は觀念的に佛陀と一致し。表面は個人にして人格を具す、唯知力的に佛知見開示して佛智と契合するのみにあらず、心情解脱し融合し全く情操を佛陀の中に安立し志節峻潔にして芙蓉の如く跡を塵裏に和するも未だ曾て泥に染着せず、法界を身とし一切の萬類を重擔として同事利行六度の行を以て弘願の爲に絶對眞心の中に最勝の精神生活するものは菩提薩埵是なり。

佛界に二種あり、眞佛と人佛となり。眞佛とは、絶對眞法身。無限の光壽。世界萬物の根底にして、亦一切の萬類を統攝し一切活動力の歸趣する處。三千十界は是の絶對至理を本體として又此に攝取靈化せざるなし十方刹土の法報應の三身及び變化身等も悉く此を以て所依とす。

人佛とは眞佛より發展し一切衆生に救度の道を示さんが爲に人中に出現し摩奴即ち人佛として衆生を度す。釋迦牟尼佛是なり。十方諸佛も亦復然り。

眞佛は圓滿報身に發展し、至眞至善至美の靈界最高の處に儼臨し神聖、正義、恩寵等、及び一切能、一切慧等を屬性とし無上の權威を以て智無上無限の愛より光明普ねく十方無限界を照す常恒

四六

四七

不斷に一切を攝化する。

四八

### 歸趣

衆生は元佛性を具有し且つ主我罪惡を覆り十界各十界を具す。

十界各十如を有す即ち互に相合すれば百界千如なり。國土と五陰

と衆生即ち土、身、心なり。此三世間に配すれば即ち十如三千なり。

各々の個人は此三千の性能を具備す。縁に隨つて十界の中に何れ

にか形相をあらはすなり。人の終身の習慣と性格と行爲とは善惡

によつて三善三惡四聖を現す是唯心の所造なり各自の意向が變る

所なり。

眞理の終局に歸趣するは獨り佛界のみ。佛界に歸するは眞理の

故に自然なり、法然なり、故に往易し。唯絶對無限光壽即ち彌陀

の聖名を崇び、聖意を仰ぎそれに歸せんが爲に意に彌陀の身を憶

念し口に彌陀を稱へ身に彌陀の行動を實現す。

一念彌陀なれば一念の佛。念々彌陀なれば念々の佛。佛を念す

る外に佛に成る道なし。三世諸佛は念彌陀三昧によつて正覺を成

すとなん。

五〇

いまははやこころもやすうあまをぶね

つづうら／＼のかせにまかせて

のりえてもこころゆるすなあまをぶね

たかせのなみのあらむかぎりは

——上人遺詠——

大正十一年九月一日印刷發行

隔月發行一ヶ年前金一圓二十錢

編輯兼發行人 山崎 辨 成

印刷人 東京京橋區本八丁堀二丁目十五番地 秋場 熊 太郎

發行所 東京小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社 振替東京四九三四八番

四九